

# 土木会通信

## 第2号 平成20年6月2日

### 林君の景観・デザイン研究発表会「優秀講演賞」受賞と 清水君の日本道路会議「奨励賞」受賞

近畿大学大学院総合理工学研究科環境系工学二年生 林 顕太郎君が第2回景観・デザイン研究発表会で優秀講演賞を受賞しました。また、同じく一年生 清水 準市君の発表した論文が第27回日本道路会議において奨励賞に選ばれました。

景観・デザイン研究発表会は、近年注目を集めている土木デザインに関して、密度高い情報交換を行う場として、土木学会景観・デザイン研究委員会の主催で2005年から開催されている発表会です。従来の学術研究の発表だけでなく、実務的なデザイン事例、計画事例、調査報告、論説批評なども対象とし、デザイナー、プランナー、エンジニア、施工者および発注者等が意見交換を行う刺激の場となっています。林君は、「姫路モノレール廃線の現況と活用に関する研究」と題した発表を行い、調査・研究部門として優れた評価を受け、東北大学、早稲田大学および日本大学の学生とともに、優秀講演賞に選ばれました。

一方、日本道路会議は、社団法人日本道路協会の主催により、道路の行政、建設、維持管理、都市計画および道路交通に取り組んでいる全国の関係者が参加し、道路に関する広範な問題について意見を交換するわが国最大の会議で、1952年以降ほぼ隔年ごとに開催されています。清水君は、昨年11月の会議に参加し、「アスファルト舗装発生材からリサイクルした骨材を用いたコンクリートの強度特性」と題して発表しました。そして、第26回日本道路会議での古城君の優秀論文賞受賞に続き、学生論文として東京工業大学の学生とともに奨励賞に選ばれました。

両名の受賞は、彼らの自信につながるとともに、後輩たちの目標や励みとなっています。学外での発表の機会が、学生の探求心と意識のより一層の向上には重要だと感じており、今後、学生が学会発表の場でますます活躍することを期待しています。

(学科長 柳下 文夫)



### 在外研究便り (カルガリー大学より)

高野 保英 講師

社会環境工学科講師の高野保英です。土木会会員の皆様におかれましては、平素から社会環境工学科の教育・研究活動にご助力いただき、誠に有難うございます。

さて私は、近畿大学から在外研究の許可を受けて、4月1日より客員研究員としてカナダのカルガリー大学理学部地球科学科に滞在しております。平成21年3月末までの滞在予定で、地下水の数値モデルに関する研究に取り組んでおります。この場をお借りして、こちらの様子などを簡単にご報告いたします。

カルガリー市は、ロッキー山脈の東に位置するアルバータ州最大の都市で、1988年には冬季オリンピックが開催されました。カルガリー大学は、市の北西部にある16の学部と約3万人の学生を有する大学です。

私がいるのは理学部 (Faculty of Science) なので、工学教育の状況についてはよくわかりませんが、先日学内の芝生で測量の実習を見ました (雰囲気は日本とあまり変わらないようです)。ちなみに工学部 (Schulich School of Engineering) には5学科あり、土木工学科もあります。総じて学生は真面目なようで、図書室や廊下に置かれた机で勉強している学生が多数います。また携帯電話で話す学生も、日本ほどはいません。大学内の施設は豊富で、恐らく100人以上は入ると思われるジムや寿司も売っているフードコートがあり、コンビニ、カフェテリアなども多数あります。

こちらでの生活にはまだ慣れず、英会話もほとんどできないので、電話の契約や保健の加入などで苦労しました。またこちらはまだ寒く、たまに雪も降りますが、建物の中は暖房が効いて暖かいので、着る物の調整もかなり厄介です。幸い研究の環境は整っており、モニターが2台あるパソコンもいただき、論文などもゆっくり読むことができます。

今後の生活にまだ多少の不安が無いでもありませんが、取り敢えずこちらの生活と研究を楽しんでいきたいと思っております。

## 近畿大学 33 年の思い出(その 2 完) 谷平 勉 (教授 平成 19 年 3 月退職)

昭和 53 年、伊藤剛先生が退職された。土木工学科では毎年懇親会を一泊するのが恒例になっていた。宴会後の時間、伊藤先生を囲んでちびちび飲みながら昔話を聞くのが心地よかった。退職されたあとに一度ゆっくり先生の昔話をたっぷり聞きたいと思いつつ、東京まで出向く機会がないままに先生は往生された。

昭和 56 年星先生が退職された。国立を定年退官され 9 年間居られたことになる。同じ構造系ではあったが、その頃にはあまり学会には出てこられず、面識はなかった。私を世話してくださった水野先生が私の着任時に紹介いただいたときにも少し体調が十分でない様子で構造系を私に任せたいということであったようだ。星先生も退職後 3 年ほどで病没された。7 年ほど同じ職場にいたにもかかわらず、ほとんど個人的な会話をせずにいたことを、今になって反省する。なんとも小憎らしい奴と思われていたに違いない。約四十歳、未熟だった。

昭和 62 年川本正身教授が休職中になられた。今で言う老人性結核かと思われるが、今の医療技術ならまだまだ長生きされたことだろう。川本先生は私の着任後 4 年経ってから来られた先生で、温厚、篤実、教育者の条件を多分に持ち合わせておられ、親しく付き合っていた。思い出して気持ちが和らぐいい先生だった。

平成元年、前田幸雄教授が辞められた。国立大学を定年で来られた場合 4 年間というルールがその頃には定着していた。橋梁工学の権威として名のとおりの人だった。私の教授昇任が遅いというので、ずいぶん発破をかけられた。大阪モノレールの鋼桁横桁取り付け部の疲労の実験で、その頃出来上がっていた大型実験設備の 200 t アクチュエータを使い実物大疲労実験という当時としては画期的なテーマであったが、ずいぶん骨の折れる実験だった。まだ体力気力は衰えてはいなかったが、学会の疲労分野に参入するのにずいぶん気苦労が要った。

平成 5 年水野先生が退職された。ずいぶんお世話になった。先生が私を近大に勧めなかったら、別の人生をたどっていたことは確かである。この前年、平成 4 年教授に昇任したが、教授昇任のことまで、退職駆け込みでお世話になってしまった。不肖の教え子であった。

助教授 14 年はずいぶん遠回りだったが、平成 2 年には米国メリーランド大学に 1 年間留学というおまけを戴いた。50 歳の誕生日を向こうで迎えたことを、自分自身の記念碑に刻んでいる。この留学のおかげで以後の生活が変質した。教育観、研究観、そして人生観が変わった。人生 50 年を振り返り、後の人生が少し見えはじめ、自分なりの世界観が芽生えだした。

その後平成時代が進むにつれ、土木という世の中が変わり始めた。大学も変わり始めた。学科内の一泊懇親旅行もいつの間にか消滅していった。学生気質もどんどん変化していった。教育の本質に変わりはないと確信しつつも、新車ばかり勢いよく走っている車群のなかに、ひとり後生大事にポンコツ車でよたよた走る違和感、隔世感をここ数年、次第に強く感じはじめていた。66 歳定年制になりちょうど今年が自分の歳にぴったりと当てはまった。これを天与の恵みと受け取り、ポーと霞む終着駅までつづくローカル線に乗り換えた。新たな生活に好奇心は継続している。

追記：本文は平成 5 年までたどってきた。

教員のなかには助手、実験助手が入れ替わり大勢いた。楽しくお付き合いいただいた。おおむね教え子ではあったが、同僚でもあった。名前を辿るだけで思い出が巡る。

いつかお会いして、昔話を肴にしたいものだ。 (終)

(谷平先生：2007 年 3 月定年退職)・写真右上



# 教員の近況

- 江藤 剛治 教授 : 最近、レーダ雨量計、地下河川の研究にもカムバックしました。
- 三星 昭宏 教授 : 「日本福祉のまちづくり学会」会長として走り回っています。あと5人で会員1,000人、皆さんご入会下さい。「大学コンソーシアム大阪」単位互換事業委員長などというのもしています。テーマの「大阪学」は面白いですよ。関西経済同友会寄付講座はなかなか。社会人も聞けますのでホームページを検索してください。
- 久武 勝保 教授 : 今年はジャビー申請のために教員一同鋭意努力しております。
- 佐野 正典 教授 : 最近の研究課題は「排水性舗装混合物のリサイクル技術の開発」を産官学のプロジェクト課題として、また産官学の共同研究として「歩車道境界部の縁石形状の研究」に取り組んでいます。多くの方のご支援をお願いいたします。
- 米田 昌弘 教授 : 「健康で元気に教育・研究に取り組める」のは本当に幸せなことです。
- 柳下 文夫 教授 : “山青水秀人健久” 学科長職もあと数ヶ月。解放を待ち遠しく想う日々です。
- 久 隆浩 教授 : 関西各地のまちづくりの現場で、行政職員の方々、住民のみなさんとがんばっています。
- 竹原 幸生 准教授 : 近畿大学に奉職しまして20年目を向かえる節目の年となりました。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしく願い申しあげます。
- 岡田 昌彰 准教授 : 昨今、景観や土木遺産に関する社会的関心が高まっております。皆様の身近な景観的課題や”地域の発見”などありましたら、是非とも情報をご提供頂ければ幸いです。
- 沖中 知雄 講師 : 貧乏暇なしでバタバタと日を送っています。
- 東山 浩士 講師 : 教務委員を担当しています。新年度のオリエンテーションを終え、一息ついたところです。
- 嶋津 治希 講師 : 着任して3年が経過し、いろいろ慣れてきました。これから一層頑張ります。
- 麓 隆行 講師 : 初夏の陽気の中、実験、研究室イベントなど楽しく過ごしています。いつでも遊びに来て下さい。
- 松井 一彰 講師 : 4月より近大周辺をフィールドにした環境・微生物の実習をはじめました。類似研究の報告がほとんどないので、実習といえど予期せぬ事が多くて新鮮です。
- 大野 司郎 助教 : 迅速・小型・高精度な地盤調査手法の開発と遠心模型実験を行っています。宅地・建設現場・異常な地盤変状箇所など地盤調査フィールドがありましたら、ご連絡ください。



# まちづくりの現場から学んだこと

環境系工学専攻・博士前期課程2年 山根 和也

私は現在、久先生の研究室に所属しています。研究室に配属になったときから、出来るだけまちづくりの現場に行こうという思いがありました。今は、いろいろなまちづくりワークショップや地域イベントのお手伝いに行っています。具体的には、茨木市の春日商店街・打ち水大作戦や子どもまちづくり塾、TMO祭り、八尾市の市民活動まつりや市営大正住宅建替え協議会、門真市の幸福町・中町まちづくり基本構想ワークショップ、京都府の西高瀬川河川整備ワークショップなどに参加してきました。一口にまちづくりと言っても、内容やそれに係わる人はさまざまです。例えば、打ち水大作戦では春日商店街のお祭りに合わせて一斉打ち水やキャンドルナイトなどが行なわれました。その中で、大阪大学や梅花女子大学の学生と一緒に「学生チーム」としてオープンカフェを出し、同時に子どもたちに風鈴作りを教えたり、商店街の店舗紹介VTRの上映等も行ない、イベントを盛り上げました。

こうした場では、市役所の方、コンサルタントの方、他大学の学生など、また、小学生から年配の方まで、幅広い年齢層、職業の人と出会うことができます。1人では出来ないこともいろんな人が集まることで実現していく力の大きさや楽しさを実感しました。大学の中にいるだけでは学べないことがたくさん学べたと思います。いろんな人と出会い話をすることで視野が広がると同時に、コミュニケーションの大切さを感じました。

また、私個人としては建築にも興味を持っており、まちづくり活動に参加する一方で建築も勉強しています。コンペ（設計競技）に応募したり、実際に建築を見に行ったり、展示会・講演会に行ったりもしています。どこかでまちづくり経験が建築に、建築がまちづくりに活かさないかと思っています。

まちづくりや建築の現場では、見たこと、聞いたこと、感じたこと、考えたこと、つまり経験することを大事にしています。また、目に見えるものだけでなく、音やにおいや味、感覚、人の気持ちや想いなど、目に見えないもののほうが大事な気がしています。大学院に進んで視野が広がり、考え方も深まり、まだまだわずかではあるけれど、物と物、人と人との繋がりが見えてきたように思います。学部の間ではわからなかったこと、見えていなかったことが多々ありました。

最後に、まちづくりは絵のようなものだと思います。パレットにチューブから1色ずつの絵の具を出す。1つずつの色はだれが出しても同じ色だが、いろいろな色を混ぜてみることで自分の色を出すことができる。その時にこそ面白みを感じる。あとは自由に描くだけ…。キャンバスという枠を超えて。



編集後記：土木会通信の第2号をお届けいたします。第1号より早7ヶ月が過ぎ、大学にも新入生が入学、今は新緑の美しい季節となりました。

今号には学科の先生方の近況も掲載いたしました。ご意見ご感想をお待ちしております。